〔研究ノート〕

鹿背山焼に描かれた図案について

鹿背山焼は江戸時代後期から明治時代にかけて、現在の京都府木津川市鹿背山で焼造されました。陶器および磁器を焼造し、特に祥瑞など日本にもたらされた中国明時代末期の青花に影響を受けた作風を作り、販売したことで知られます。

大和文華館では昨年の2021年初めに特別企画展「中国青花と染付磁器―京都の鹿背山焼―」を開催し、鹿背山焼に見られる中国陶磁の要素に注目しました。現存する鹿背山焼からは、中国・明～清時代の青花磁器の精巧な写しだけではなく、中国陶磁の文様や技法を取り入れた独自の図案が見られる点が特徴といえます。また、地元の寺院に納める仏器など様々な需要に応えて作風を変えて焼造していた様子がうかがえました。文様や図像の内容や典拠が不詳なものもありましたが、本稿では展覧会で取り上げた鹿背山焼二点について再考します。

まず、「染付陶板」（図1 江戸後期―明治時代・19世紀 個人蔵）は染付で人物図に讃が添えられています。一人は直立し、一人は鉄砲を構える姿であらわされています。この陶板に描かれた人物図については画題がよく分からずにいましたが、展覧会を観覧した遠山記念館館長の鈴木廣之先生より、『北斎漫画』第六編（文化14〈1817〉年刊行）に同じ図像が見られることを御教授いただきました。『北斎漫画』第六編は剣や鎗、弓や銃、馬などを扱う武術のかたちが集められ、そのうち、砲術の初めの頁にこの図像が掲載されています（図2）。2人の姿や服装は陶板とほぼ同じで、陶板では地面の傾斜が緩やかになっているものの、陶板に描かれた図像の典拠が本図に求められることは明らかといえます。陶板は『北斎漫画』で添えられている文字が取り去られていますが、もとの図では頁の右上には「天文十二癸卯八月廿五日／大隅国種ケ嶌二瓢流」、左上に「牟良叔舎／喜利志多孟太」と片仮名でルビを付した文字が認められます。

図1

図2

天文12（1543）年は、大隅国（現在の鹿児島県）種子島に鉄砲（火縄銃）が伝えられたとされる年です（1542年とする異説あり）。種子島時堯に鉄砲を売った2人のポルトガル商人として『鉄砲記』（文之玄昌編纂　慶長11〈1606〉年）には「牟良叔舎」と「喜利志多佗孟太」の名前が記され、それぞれフランシスコとダ・モッタにあたるとされています。「ムラシュクシャ（牟良叔舎）」は同じく北斎の『絵本早引　名頭武者部類』（天保12〈1841〉年刊行）に異国の服装で鉄砲を構える姿が掲載されており、画中の2人は清朝の服装のようですが鉄砲伝来の様子と見られます。

陶板では図像をほぼ忠実に写しながら、原図の文字は消し、代わりに、鹿の鳴き声が山にこだまする様子を詠った和歌「恋こかれ　こがるる鹿のこたまにて　向ふの鹿で山がなくなり」が添えられています。銃声の木魂する音に鹿の鳴き声を重ねているのでしょうか、鹿背山焼には鹿を題材とした文様が多く見られますが、陶板では和歌によって鹿背山に結びつけているようです。

もう一作品は「染付人物文鉢」（図3　江戸時代後期　嘉永3〈1850〉年銘 個人蔵）で、高台内部に染付で「大日本嘉永三年於平安南鹿背山製」の文字が記される数少ない基準作の一つです。器の外側面に描かれた人物図は元・明時代に流行した戯曲や小説の挿図を典拠としていると想定しましたが具体的な内容の特定まで至っていませんでした。しかし、特徴ある画面構成と図像を手掛かりに内容を探ると、画題は元時代の王実甫による戯曲『西廂記』であり、版本の挿図をもとにしている図像であることが見えてきました。『西廂記』は書生の張生が科挙に向かう旅の途上、山西省の普救寺で崔鶯鶯と出会い、繰り広げられる恋愛劇です。元曲の中でも名高く、明時代には挿図入りの版本が数多く刊行されて流通しています。

鹿背山焼の鉢にあらわされた4図は、崔鶯鶯が普救寺に逗留していることを聞き出した張生が寺の西廂に部屋を借り、夜に塀の脇に立ち、侍女の紅娘とともに姿を現した崔鶯鶯が亡き父のために焼香をする様子を見ている場面（第三齣・図4）、普救寺の僧正が崔鶯鶯の亡き父のために法要を営む場面（第四齣・図3）、孫飛虎が崔鶯鶯を娶ろうと軍を率いて普救寺の門前で迫っている場面（第五齣）、そして、崔鶯鶯を救おうと、張生が知古の杜確将軍に救援を求める手紙を普救寺の僧侶の一人に託して使いに出す場面（第六齣・図5）と考えられます。これらに対応する戯曲の場面は『重校北西廂記』（図6 明・万暦26〈1598〉年刊本『重校琵琶記』所載　内閣文庫所蔵）や『北西廂記』（図7　明刊本）に掲載された挿図に見ることができ、塀の屈曲した形や扇を持って立つ張生の姿、または張生や普救寺の僧上らに見送られて勇ましく出立する使者の姿や構図が共通して認められます。数種の版本を典拠に用いているのか、あるいは『西廂記』が描かれた陶磁器を手本とした可能性などが考えられ、今後の課題となりますが、鹿背山焼が文様に幅広く典拠を求め、多様な需要に応える作品を作っていた様子がうかがえます。

（瀧朝子）

※図1・3は図録『特別企画展　中国青花と染付磁器―京都の鹿背山焼―』（大和文華館　2021年）、図2は永田生慈監修『北斎漫画二』（平凡社1987年）、図6は国立公文書館デジタルアーカイブ、図7は神田喜一郎監修『中國戯曲善本三種』（思文閣出版　1982年）より複写させていただきました。図4・5は筆者撮影。

図3

図4

図5

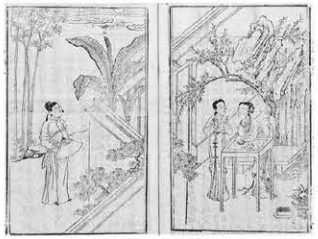

図6『北西廂記』

図7『北西廂記』

季刊 美のたより No.218
令和4年4月1日
発行　大和文華館

Copyright © The Museum Yamato Bunkakan. All RightsReserved.